

# ひがしの

年度末号 東野小学校報 No.14

3月11日、東北地方と関東地方を襲った巨大地震とすべてのものを飲み込み流してゆく津波、テレビから流れる映像は、計り知れない人智を超えた自然の力を見せ付けるものでした。多くの方が犠牲となり、行方不明の方も多くみえます。必死の思いで難を逃れた方も生活の基盤が崩れた中、たいへんな苦勞をされています。さらに追いつけるように、原発の問題が起こり、いまだ被害の全体像がつかめていません。被災されました方々には心よりお見舞いを申し上げます。また、被災者の援助をはじめとする災害対策に全力を尽くしてみえる方々に深く敬意を表します。

恩讐の彼方に 校長 青山龍三

東日本大震災では多くの方が命を賭して災害と戦っています。その報道に触れたときわたしは「恩讐の彼方に」の了海（市九郎）を思い出しました。市九郎が自分の犯した罪深さから、出家して了海となり旅に出ます。羅漢寺詣での何人もの参拝者が命を落とした断崖の道を見て、この絶壁をくり抜くことを思いつきます。そして掘り進めたとき、父の敵を討とうとする実之助に見つかります。了海はこの<sup>ずいどう</sup>隧道が貫通するまで待つてほしいと頼みました。実之助は手伝ったほうが早く仇討ちができると思い、協力しました。そして、21年目、ついにその隧道は完成しました。『いざ、実之助殿、約束の日じゃ。お斬りなされい。かかる法悦の真中に往生いたすなれば、極楽浄土に生まること、必定疑いなしじゃ。いざお斬りなされい。・・・』と了海は言うが、『実之助は、了海の前に手をこまねいてすわったまま、涙にむせんでいるばかりであっ

た。』実之助に仇討ちを忘れさせた了海には、人の役に立ちたい、そのことで燃え尽きたら後のことは考えないというところざしにあふれていました。

必要とされているところで自分の力を尽くせたという公共的な貢献、公共心が満たされたとき、人の心は本当に満たされる、これが『恩讐の彼方に』のテーマだと思います。



昨日卒業式で、東野小学校で6年間学んだ卒業生に佐藤一斎の言葉を送りました。『学は立志より要なるは莫し。而して立志も亦之れを強うるに非らず。只だ本心の好む所に従うのみ。』（学問をするのに志を立てることより重要なことはない。しかしこのことを強要してはいけない。本心の好みに従うことだ。）簡単に言えば、心を奮い立たせるためには、自分の好きなことをすることだ、ということです。大切なのは「心を奮い立たせる」という経験です。この経験が新しいことを学ぼうとする礎になるのです。そして、この「学び」が自分を高めることにつながっていきます。

自分も含めてきっとそうだろうと思うのですが、人は自分がしたことや作ったものなどで他の人が喜ぶのを見るところうれしくなり、充実感、達成感を感じ、心が満たされるものだと思います。高めた自分の力をどこに発揮するかも含めて、力だと思います。



19名の卒業生には、是非それぞれの力を高めて、それを了海のように、必要とされているところで自分の力を発揮できるチャンスをつかんでほしい。「心を奮い立たせる」経験で力をつけ、「心を満たす」ところでその力を使う、そんな生き方ができることを願っています。